

## 週刊 座、グレート・リーダーズ通信

## 『インド私録-思い切り取り組んだこの50年-』No.7

## 今週のキーワード! 勅使河原宏

## 芸術家を唸らせた遺跡とは

『インド私録』を読むと、著者の職業柄首脳級の日印の著名政治家とのエピソードが当然のように出てきます。今でこそ政治家がブログやツイッターなどで自らの考えや「素顔」を公開するご時勢ですが、武藤氏が職務上身近に接した時代の政治家たちは私たちにとって雲の上の存在でした。そうした彼らが武藤氏に見せた知られざる一面、それがこの本の面白さの一つでもあるのですが、第7回放送に登場した草月流の勅使河原宏氏は、その審美眼、美の表現からして一際異なる輝きを放っています。

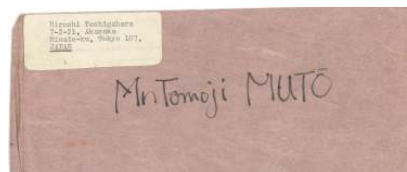
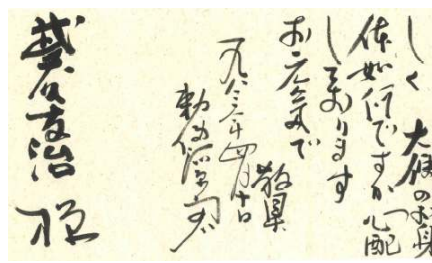
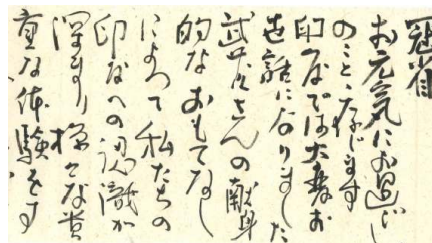
勅使河原氏はユネスコの世界遺産にも登録されたタージ・マハルの前に立っても「感動のそぶりすら見せなかった」(『インド私録』)。その勅使河原氏が感動したのは、たまたまタージ・マハルに来ていた三人の農民楽師による白亜の霊廟を背景にした即興の演奏会でした。この演奏会を演出したのが武藤氏ですが、現在80歳の同氏に私たちがしばしば驚かされるのが身軽とも言える行動力です。このときも、楽器を携えた三人を見かけるやすぐに声をかけている様子が後に勅使河原氏の手記に書かれています。

また、勅使河原氏を唸らせたの

が、タージ・マハルにも程近いところにあるこれも世界遺産のファティプル・シークリです。赤砂岩でできたこの砦を、「うーん、石の彫刻が揺れ動いているように見える。実に美しい」(『インド私録』)と表現しています。この遺跡はタージ・マハルの陰に隠れて見過ごされがちですが、武藤氏お薦めのスポットです。揺れて見える彫刻、見てみたいものです。

また、放送で武藤氏流タージ・マハルの見方を伝授しています。

「上を向いて歩こう」ではなしに、下を向いて門を入るまで絶対にタージ・マハルの姿を見ないように



勅使河原氏からの書状とその封筒。書状は約162センチの長さの巻物となっています。写真は書き出しの部分と結びの部分です。(ともに武藤友治氏所蔵)

すること!

さて、旅を終えた勅使河原氏からの書状は『インド私録』に一部原文が紹介されていますが、これは写真のような和紙に毛筆の書状で届けられました。「また訪れたい」と言わしめているあたり、外交官は駐在先の国の観光大使にもなりうるのでしょう。

## バチッタル・シン氏とともに

## 日本を売り込むキャンペーン

後年、偶然にも約20年ぶりに電話越しに再会を果たしたデリー勤務時の担当ドライバー、バチッタル・シン氏とは、「文字通り寝食を共にした仲」とのこと。大使館が日本を映画で紹介するキャンペーンを打った際には、機材や発電設備を積み込んだ大型ジープで地方の村々を回って夜、野外上映会を開くという約一週間のキャラバンを何度も行い、そのときジープを運転するのはシン氏だったとのこと。

シン氏とは電話で話して以来に会う機会はないものの、彼が無事に大使館の仕事に勤め上げ、郊外に家を持って悠々自適の年金暮らしをしている、そのことが何より嬉しいとのこと。誰しも胸が熱くなる消息でした。

## ラジオ・ニュームンバイか

## らのお知らせ



第9回放送は7月27日です。